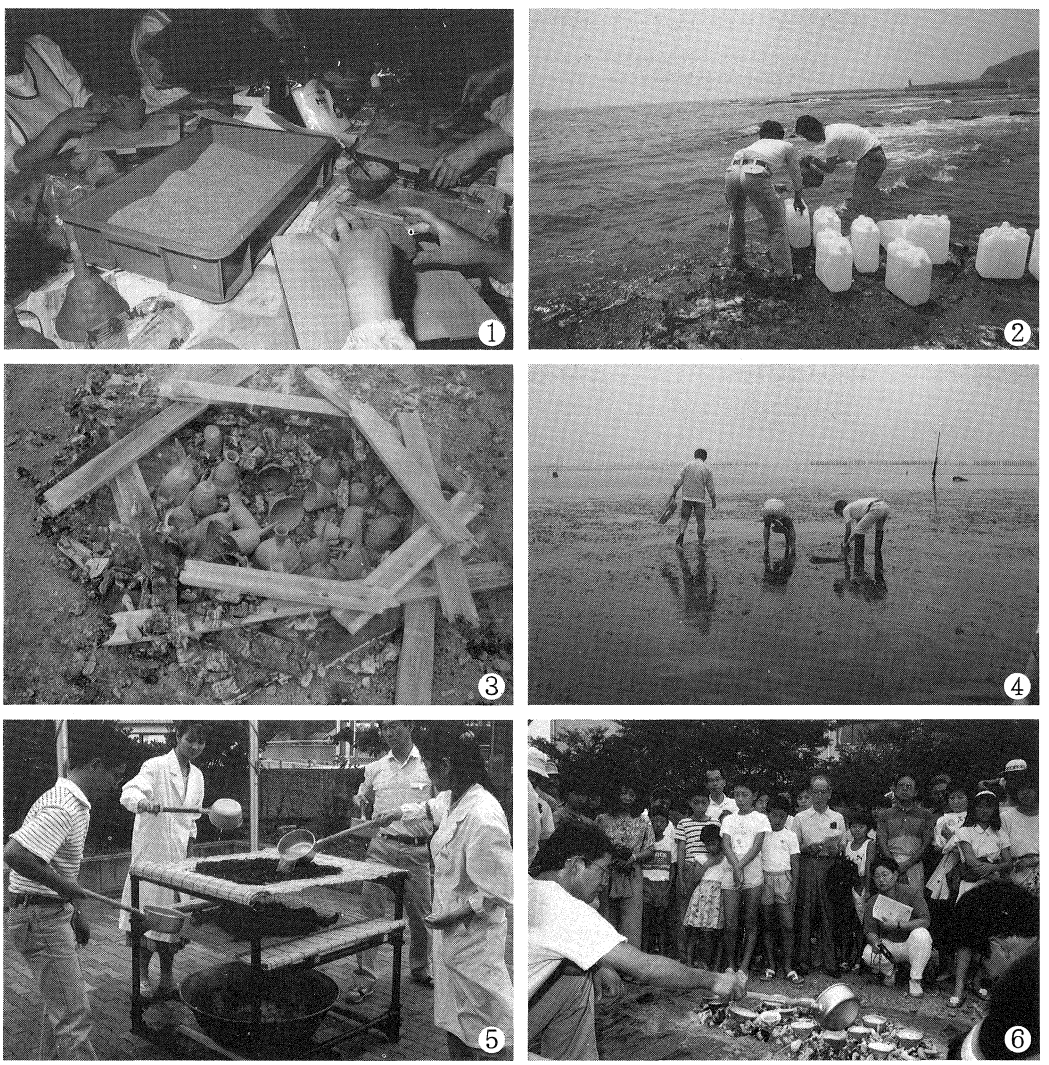
埋蔵文化財 愛知

No. 26



①製塩土器づくり、②海水汲み、③製塩土器焼成、④アマモ採取、⑤藻塩実験、⑥煎熬実験

古代の塩づくり実験

平成３年度埋蔵文化財展の一環として、西尾市資料館（第１会場：８月３日）、県埋蔵文化財調査センター（第２会場：８月25日）において古代の塩づくり実験を実施した。天候にも恵まれ、第１会場では220人、第２会場では180人という大勢の見学者を得ることができた。（４頁に関連記事掲載）

シリーズ　江戸時代を掘る 2

武士のくらし ――― 名古屋城三の丸遺跡の調査から ―――

名古屋城三の丸遺跡は、名古屋台地の西北端に位置し、尾張徳川家につかえた上級家臣団の役宅や役所、城の鎮守天王社や東照宮のあったところで、遺跡の面積は６２万㎡にのぼる。三の丸の郭内での調査は名古屋市公館地点をはじめとして、丸の内中学校地点、県図書館地点、名古屋第一地方合同庁舎地点、簡易・家庭裁判所地点、現在調査中の県警本部地点を含めてもいまだ２２０００㎡にすぎない。

これまでの調査により弥生時代の竪穴住居跡、古墳時代の墓、中世末期の溝、戦国期の城館跡、近世の屋敷跡などの遺構と共に各時代の多くの遺物が見つかっており、名古屋城三の丸遺跡は弥生時代から江戸時代にかけての複合遺跡であることが明らかになった。

ここでは、江戸時代の遺構、遺物に注目し当時の武士の暮しを考えてみたい。

まず住居についてであるが、各地点の調査により、武家屋敷あるいは街路を画する溝が確認された。溝からの出土遺物によって１７世紀中頃になると地割が定まることが明らかになった。溝の配置は現在残されている絵図（『尾府名古屋図』『享保名古屋図』『御城絵図』『万治年間名古屋城下絵図』等）の記載とよく一致しておりほぼ固定した地割であったことがわかる。

屋敷地内でどんな建物がどのように配置されていたのか。建物内の部屋割はどうであったか。これについては後世の建物の基礎工事による破壊が著しいために、見つかった建物、地下室、井戸、廃棄土坑（ごみため）等からの復元が困難な状況である。なお廃棄土坑の集中している部分には建物の痕跡は認められず、ここが裏庭であったと考えられる。建物以外の部分、庭や空き地すべてが廃棄土坑によって掘り返された場所もあり、当時の塵芥処理の一端を知ることができる。ところで廃棄土坑群とは異なった場所に掘られた遺物のほとんど出土しない大規模な土坑がある。周囲を詳しく調べると建物の跡が見つかったりする。建物の内部に含まれ、こうした土坑が地下室と推定できる。

廃棄土坑、溝、井戸等からは当時の人々の暮しを彷彿とさせる膨大な量の遺物が見つかっている。ただし、木製品、金属製品の大部分は腐朽し去り、遺物として見つかるのは土器・陶磁器、硯・石臼・五輪塔等の石製品、それに瓦等の日常生活の一部を構成していたものに限定されるのである。

最も出土量の多い陶磁器類を中心に見ると、食器としては、茶碗・皿・向付・鉢・急須・土瓶・徳利・猪口が、調理具には、擂鉢・練鉢・片口鉢・土鍋・行平が、貯蔵具としては、壷・甕がある。嗜好用具として、天目茶碗・茶碗・茶入れ・風呂の茶の道具が、喫煙具として煙管・火入れ、灰落しがある。なお煙管のほとんどは青銅ないし真鍮製である。また化粧道具として、お歯黒壷・紅皿・紅猪口・鬢盥などがある。神仏具として、仏飯器・仏花瓶・香炉・線香立て・御神酒徳利があり、燈火具として、燭台・灯明皿・灯明受皿・芯押えがある。その他に趣味の用具として、餌鉢、餌摺、植木鉢、箱庭用小道具や各種人形の玩具がある。

これら陶磁器は地元の瀬戸・美濃製品が最も多いが、唐津・有田を含む北九州地域の製品がそれについでいる。このほか常滑、信楽、京都、備前、さらには遠く中国からの輸入品もみることができる。

陶磁器類の他に木質部が腐植し表面の漆部がわずかに残った漆器椀や箸等の木製品、小柄、鍔などの金属製品、硯、印章、石臼等の石製品が出土している。

生活用品から上級武士（名古屋城三の丸遺跡）と町人（名古屋城下町の各遺跡）の違いを見いだすとすれば、使用された製品の中に高級品があるかどうかで、出土遺物を見るかぎり日常生活用具にそんなに違いはないのである。

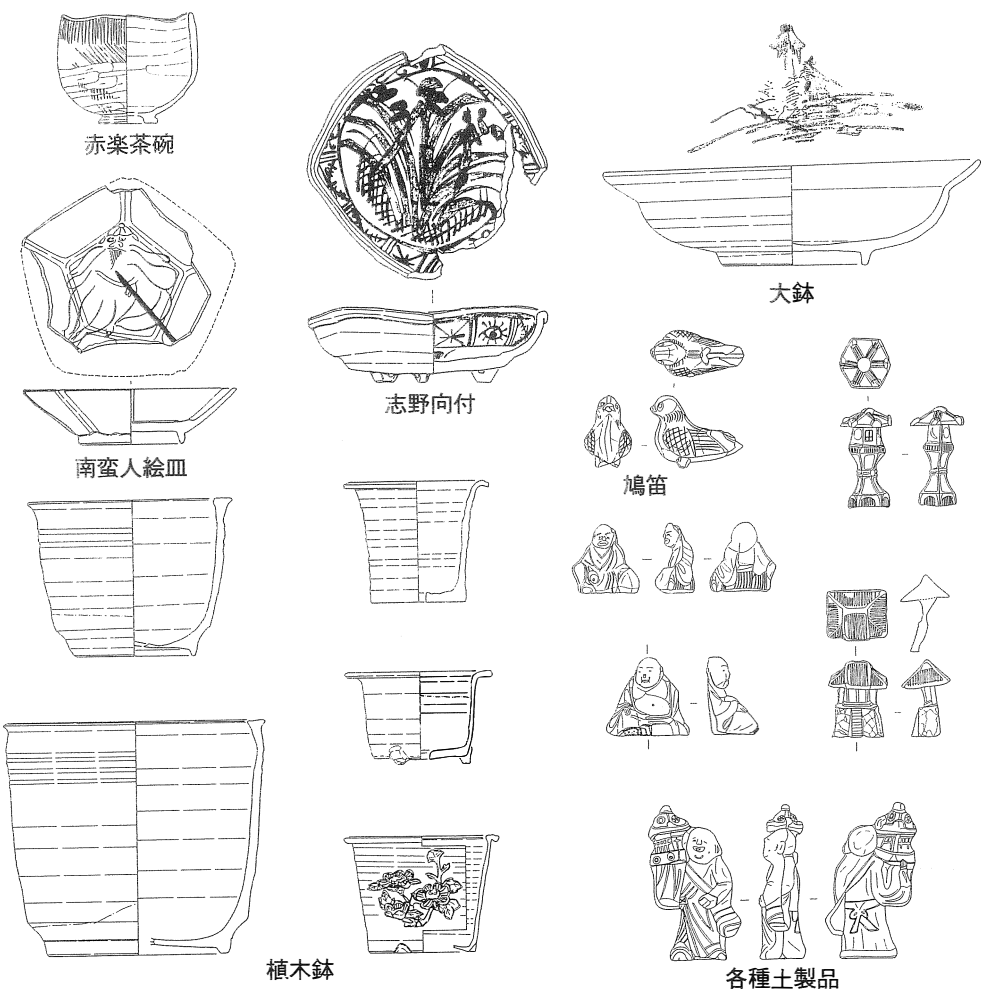
武家屋敷ならではといえるものとして、陶器

では志野向付、織部角向付、赤織部鉢、南蛮人絵皿、京焼き風大鉢、唐津尺鉢、磁器では肥前磁器があり柿右衛門様式の鉢や肘掛け人形が、また中国からの輸入磁器では、色絵磁器の碗、散蓮花があり、さらに県警地点の調査では蒔絵の断片が出土している。

日常生活用具とは別に江戸中期頃には半胴甕の底に穴をあけた転用の植木鉢があり、江戸後期になると植木鉢用の鉢が専用につくられている。また人、動物を模した土人形は小型の人形が多く、簡易・家庭裁判所地点からは大型の八そう飛びの平能登守の人形が出土しており、大蔵永常の『広益国産考』六之巻、雛に、「此土人形といえるは、伏見人形とて城州伏見にてつくりてひさぐ家多し。近頃名古屋と三州遠州邊にてつくり出してひさぐ也」の記載のある名古屋の土人形の可能性がある。小鳥の餌鉢、餌摺や植木鉢、土人形等、余暇を楽しんでいた様子を窺うことができるのである。

ありとあらゆる生活用品が見られ、種類の多さは、江戸時代以前と比較すると雲泥の差である。鎖国と安定した幕藩体制下で、人々は平穏な生活を営み、生活も多様化し、それぞれの用途に応じた製品が大量に作り出され、受け入れられて、消費されていた。まさに大量生産・大量消費の現代の先駆けの時代であったのである。

（小澤一弘）



名古屋城三の丸遺跡出土遺物（縮尺 1/6、各種土製品の縮尺 1/4）

古代の塩づくり実験

古代の製塩法は、ホンダワラやアマモなどの海藻（草）を用いて海水を濃縮し（藻塩法による採鹹）、これを土器で煮つめ（煎熬）、塩をとったとされる。ここでは本番に先だつ事前実験の結果を中心に、我々が実施した塩づくりの過程を順に説明する。

1．製塩土器づくり（5月27日～31日）　製塩土器は一般に遺跡から出土する土器とは著しく異なるかたちをしており、胎土に多量の砂礫を含んでいる。モデルとしたのは、東海市松崎遺跡から出土した、椀形の杯部にちくわ状あるいは角状の脚部のついた知多式製塩土器。粘土には市販のテラコッタ粘土を用い、これに多量の川砂を混ぜて計75個を製作した。

2．海水汲み（6月11日）　海水採取は、知多半島・豊浜漁港の南、万葉集に「須佐の入江」と詠われた岩場でおこなった。炎天下で18ℓ入りポリ容器に10個、計 180ℓを汲み上げた。そののち、愛知県水産試験場尾張分場をたずね、知多半島沿岸域の海藻の自生地や繁殖時期などについての情報を得た。ホンダワラの採取には、水産試験場伏屋満主任研究員に協力いただいた。

3．製塩土器焼成（6月13日・7月10日）　陰干しののち、発掘現場において焼成をおこなった。焼成技術の未熟さや、粘土の素材の問題などから多くの土器が焼成時に破損してしまった。そのため再度土器を製作し焼成した。2回目は市販の野焼き陶土を用いた。

4．アマモ採取（7月11日）　大潮の干潮時に常滑沖でアマモ採取をおこなった。アマモは遠浅の砂浜に群生しており、容易に採取できた。その後、県水産試験場に向かい、アカモク（ホンダワラの類似種）と、試験場で濾過処理された知多半島沖の海水 180ℓをいただいた。

5．藻塩実験（7月17日）　藻塩法は表面積の大きな海藻に海水を何度もかけることによって水分を蒸発させたり、さらに使用した海藻を焼くなどして灰塩化し濃度の高い塩水を得る採鹹法である。以下に我々がおこなった方法について略記する。

高さ約1ｍの台を作り、スノコを敷く。その上にアカモク約3.0kgをのせ、下にタライを置いて海藻の上から海水を注ぐ。実験前の海水の塩分濃度は約3.0％。海藻をのせたスノコは1段。4人がひしゃくで海水を注ぎ、5分ごとに濃度を測定した。当日は薄曇りで風も弱く、思うように塩分濃度が上がらない。15分過ぎからはスノコを2段にした。作業を50分間おこなったが、この日は7.5％まで塩分濃度を上げるのがやっとだった。アマモでも結果は同様だった。この作業をおこなうと、海藻の色素が落ちて塩水は茶褐色になる。藻塩法による塩水(10％程度)を煮つめても得られる塩はわずかであり、効率の悪い作業ということができる。おそらくさらに塩分濃度を上げる何らかの工夫が必要だったと思われる。 360ℓの海水をすべて藻塩法で濃縮することは、作業工程上困難なため、我々は大鍋で海水を煮つめ塩分濃度20％の塩水を準備した。

6．煎熬実験（7月11日・17日）　製塩土器に鍋で作った塩水と藻塩法による塩水を注ぎ、炭火で煮つめた。塩水は土器のわずかな割れ目からしみだし、器壁には塩の結晶が付着した。また、藻塩法による塩水を注ぐと表面に被膜ができ吹きこぼれた。3時間ののち土器中に7～8割程度の結晶塩を得ることに成功した。味は食卓塩に比べて苦みが強い。藻塩法の塩水を混ぜた塩では、海水だけを煮つめた塩よりからさが少なく、ややマイルドな味だった。

以上の実験を通じて感じたことは、塩づくりはきわめて効率が悪く、非常な労力を必要とする作業であるということだった。また、この実験により、改めていくつかの疑問点が浮き彫りになった。藻塩法の実態とくに塩分濃度の高め方の詳細については、さらに検討を重ねていく必要があろう。　　（森　勇一・樋上　昇）

市町村だより

二子山古墳

春日井市教育委員会

二子山古墳は味美古墳群を代表する全長９０m余の前方後円墳（国史跡）で、春日井市のほぼ南西端に位置する。旧国道４１号線（県道名古屋・犬山線）が、庄内川水分橋を北に渡った辺りが楠町味鋺で、ここにはかつて白山藪古墳を始めとし、２０数基の古墳のあったことが伝えられている。この味鋺を北上して味美に至る味美古墳群は、現町名で二子町から中新町にまたがっている。

今回の二子山古墳周辺の調査は、公園整備に伴う事前の確認調査である。調査は平成３年８月を中心に行い、現周濠の外に、計５カ所のトレンチを設定した。その結果４カ所から、二重周濠を推測させる溝状遺構を検出した。溝の肩幅は６m前後で、深さは１mに達しない。ただ後円部近くに設定したトレンチ内では、幅１０m、深さ１m以上の溝が検出されており、その

整合性については、検討課題とされた。なお周濠部分から復元可能な円筒埴輪約１０個体の他、人物埴輪の断片・須恵器片が出土している。

その他、周濠底部を掘り込む土坑が検出され、朱塗りの杯蓋・提瓶が出土して、注目を集めた。土坑は、差し渡し５mの規模で、上面は整形されているようである。

今後、二重周濠が全周するのか、また土坑が古墳築造期の祭祀に関わるものか、この点を明らかにするため、本調査を計画している。

（大下　武）

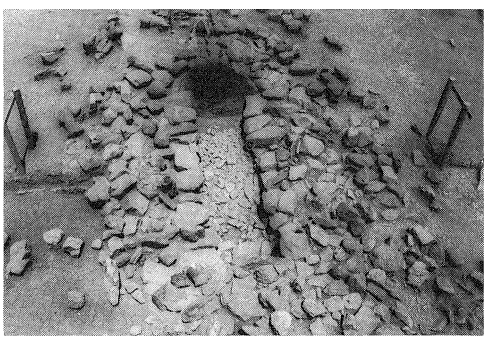
向山古墳群

一宮町教育委員会

向山古墳群は宝飯郡一宮町大字足山田字向山に所存する、３基からなる積石塚古墳群である。古墳は、標高約９０mの南へ延びる小支丘上に営まれており、この地域の積石塚が多く豊川左岸に分布するなかで、豊川右岸に所存する数少ない積石塚の一部として注目される。

今回の発掘調査はゴルフ場建設に伴う調査の一環として、平成３年７月から９月にかけて、１・２号墳を対象に実施した。

１号墳は墳丘の石材の散逸が激しく、形態も十分に把握できなかったが、主体部の周囲に長楕円形の広がりをもって石材を集積している。主体部は竪穴系の施設で、長さ2.7m、幅0.75mである。調査前に既に壁面用材の一部が露出しており、上半は失われていた。出土遺物には、主体部内に鉄剣・馬具（轡）・勾玉・管玉・小玉等があり、主体部の周辺及び墓壙内に須恵器の破片が僅かにみられた。



２号墳は現状からは径約６mの円墳と推定さされた。主体部は横穴式石室で、これも端部を欠くが、長さ４m以上、幅約１m。長方形のプランを示す石室である。過去に盗掘されたらしく、出土遺物は石室内からの須恵器が２点のみであった。

１号墳は須恵器の年代によれば５世紀代に遡る可能性があり、また２号墳は６世紀中葉の年代が想定できる。両古墳はその年代と主体部等の差異がまず注目され、さらには１号墳の遺物など、今後の検討課題を提供したといえる。

（須川勝以）

遺跡紹介

堀之内花ノ木遺跡

稲沢市

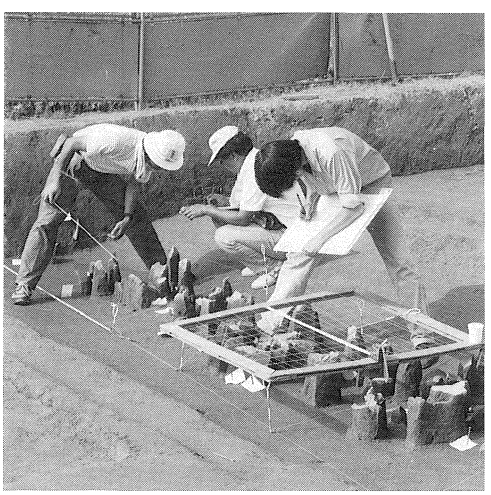
堀之内花ノ木遺跡は愛知県稲沢市堀之内町に所在し、木曽川の分流三宅川が形成した自然堤防の左岸に位置する遺跡である。今回県道名古屋祖父江線の建設にともなう事前調査を（財）愛知県埋蔵文化財センターが実施している。

現在までの調査の結果、弥生時代後期の竪穴住居や、古代、中世の遺構が確認されているが、とりわけ注目されるのが本遺跡の北に隣接する尾張国分寺の寺域を区画すると思われる東西と南北に走る二条の大溝である。この大溝は上層を後世に削平されているものの、東西の溝は幅2.3m、深さ0.7m、南北の溝は幅2.0m、深さ0.4mを測る（以下、東西の大溝を西の大溝、南北の大溝を南の大溝とする）。大溝はほぼ直交するかたちで走っており、昭和36年に調査された「塔」跡や「金堂」跡の中軸線の方向とも概ね一致する。また南の大溝は、予想される尾張国分寺寺域の中軸線付近で南北に分岐しており、この位置に「南門」の存在を想定できる。さらに南の大溝の検出状況から類推すると、尾張国分寺寺域の東西規模はおよそ 170mとなり、従来想定されていた寺域よりも東西幅がやや短くなり、南北幅が大きく拡大する可能性が高くなった。

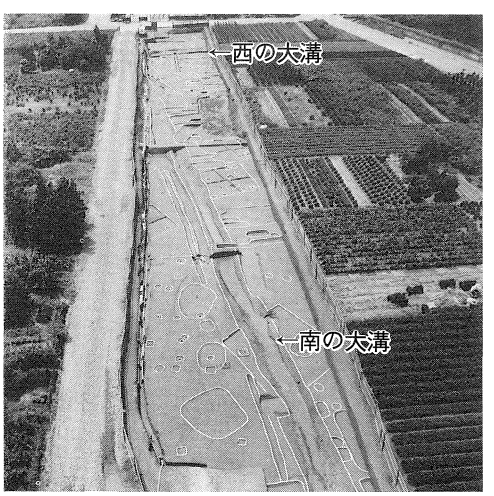
つぎに出土遺物についてであるが、西の大溝から出土した遺物の中には尾張国分寺創建時にまで遡ることができる資料がみられ、創建時に使用された軒瓦も伴出している。また上層からは奈良時代後半を中心とした一括遺物が出土している。このことは、西の大溝が尾張国分寺創建時に開削された区画溝であることを裏づけるとともに、『続日本紀』に見られる 775年の異常風雨による尾張国分寺の破損記事とも合致する。このほか西の大溝、南の大溝からは9世紀中頃までの遺物も出土しており、さらに南の大溝が廃絶した後に南門推定地付近の大溝上に掘られた井戸跡からも9世紀後半の遺物が出土している。このことは、『日本紀略』にみられる884年の尾張国分寺焼失記事と時期的に一致する。

以上が今回の調査で確認しえた尾張国分寺関連の遺構・遺物の概要である。詳しくは遺跡全体の調査が終了するのを待ちたいが、これまで不明瞭であった尾張国分寺の寺域を確認でき、さらに遺物の出土状況が『続日本紀』、『日本紀略』の記事と整合することが判明した点できわめて重要な資料を得ることができたといえよう。

（蟹江吉弘）



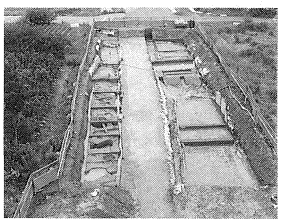
西の大溝での作業風景



調査区全景（C区）

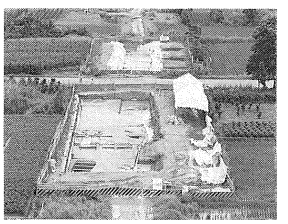
発 掘 調 査 ニ ュ ー ス

跡ノ口遺跡・一色長畑遺跡　稲沢市

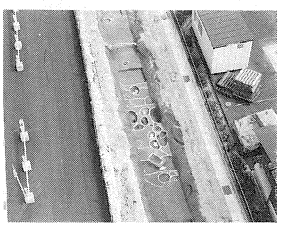

跡ノ口遺跡

跡ノ口遺跡は稲沢市一色森山町、一色長畑遺跡は同一色長畑町に所在。両遺跡とも周囲は植木畠の点在する標高２ｍほどの水田地帯で、遺構・包含層は島畠下のみで検出された。

跡ノ口遺跡は古代から中世の集落跡、一色長畑遺跡は弥生時代中期の集落跡であった。


一色長畑遺跡

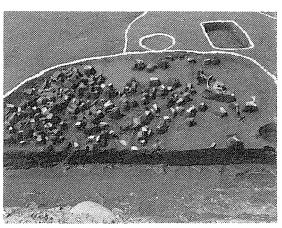
清洲城下町遺跡　清洲町


Ｅ区礎石建物

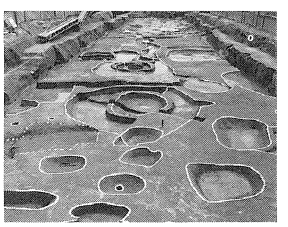
調査区は清洲城中堀の内側・本丸の対岸に所在する。江戸時代後期の土坑・城下町期後期の焼土面とそれを掘り込む土坑・城下町期前期の礎石建物・掘立柱建物（柵列か？）・平安時代後期から室町時代の掘立柱建物などを検出。地震による断層も確認できた。

Ｅ区掘立柱建物

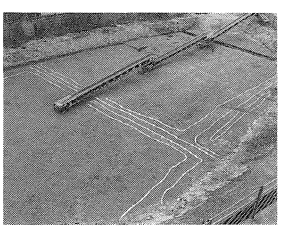
外町遺跡　新川町


Ｄ区上面　ＳＫ43

本遺跡は西春日井郡新川町に所在し、清洲城下町遺跡の南に位置する。江戸時代（18世紀後半～19世紀初頭）を中心とする遺跡で、溝３条・井戸３基、その他土坑を検出した。またＡ区では清洲城下町最末期の溝と、Ｄ区下面で中世の土坑をそれぞれ確認した。

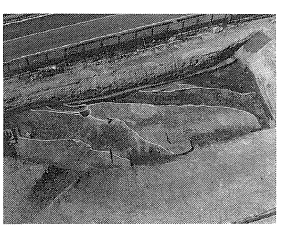

Ｄ区下面

松河戸遺跡　春日井市


Ａａ区上面

Ａａ区では13世紀の屋敷地の一劃を調査し、溝２条、土坑・ピット数基を検出。Ｂ区では13世紀の溝２条、12世紀の溝１条、９世紀の溝１条を検出。

上面では近世の水田跡が１層のみ残存していた。


Ｂ区全景

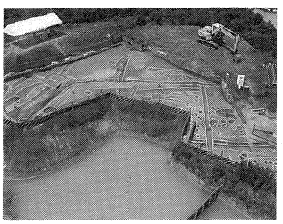
不馬入遺跡　幸田町

全景（南西より）

不馬入遺跡は、額田郡幸田町大字須美字不馬入に所在する。遺跡は旧平坂街道沿いに位置し、幡豆山塊の谷裾北向き斜面（標高約53ｍ）に立地する。調査区からは、土坑23基、溝３条等を検出し、これらの遺構にともない、近世中、後期の陶磁器類が出土している。

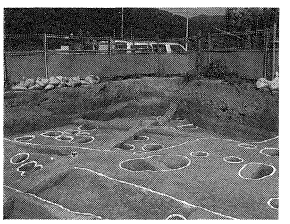
作業風景

西迫遺跡　幸田町



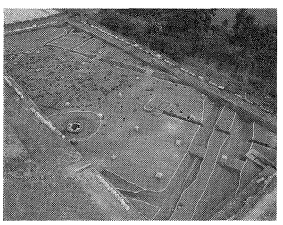
調査区全景

茶臼山（標高 291m）の北麓から続く台地上の遺跡である。鎌倉時代の溝、掘立柱建物の一部と思われる柱穴列、井戸、多数の土坑等が検出された。出土遺物の多くは、灰釉系陶器（椀・小皿）、土師器（皿）であり、常滑焼（甕）や青磁片も混じる。



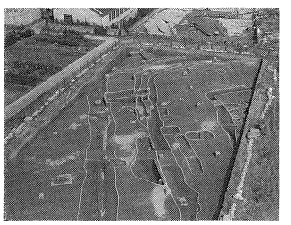
土坑群

室遺跡　西尾市



Ａｂ区全景

広田川左岸の自然堤防上に位置し、調査面積の半分（4400㎡）の調査を終了した。中世の屋敷地を区画する溝、柱穴、井戸などを検出した。遺物は灰釉系陶器を中心に、中国陶磁等も出土している。また、火葬施設が11基確認された。



Ａｃ区全景

センター日誌

埋蔵文化財展

第１会場　西尾市資料館

７月27日～８月４日（９日間）入場者数1264名

第2会場　愛知県埋蔵文化財調査センター

８月12日～８月25日（14日間）入場者数1283名

埋蔵文化財講演会

第１会場　西尾市文化会館

８月３日（土）

白石太一郎（国立歴史民俗博物館）

「断夫山古墳の造られた時代」入場者数 250名

第２会場　弥富町総合社会教育センター

８月25日（日）

金関　恕（大阪府立弥生文化博物館）

「弥生時代の心の暮し」　入場者数 205名

埋蔵文化財基礎研修会

愛知県埋蔵文化財調査センター

８月22日（木）・23日（金）　参加者　27名

現地説明会

７月20日（土）

堀之内花ノ木遺跡（稲沢市）　参加者 250名

尾張国分寺の寺域をめぐる溝等。

８月10日（土）

室遺跡（西尾市）　参加者 240名

中世居館跡と溝等。

来訪者

4/11	静岡県埋蔵文化財調査研究所　木下智章氏	
19	宝飯郡小坂井町　出口　剛氏他	3名
26	十四山西小学校	20名
5/ 2	三重県埋蔵文化財センター	4名
10	弥富町立桜小学校	146名
6/ 5	国立歴史民俗博物館　西本豊弘氏他	11名
6	名古屋大学　中井信之氏他	5名
10	東海市平洲記念館　立松　彰氏	
21	知多事務所広報課	15名
24	津島市立蛭間小学校ＰＴＡ	50名
27	走る県政教室	50名
28	尾張地区高校社会科研究会	43名
7/18	知立市教育委員会	13名
23	一色町教育委員会	16名
25	婦人文化会館理事長他	6名
30	小牧市教育委員会	50名
31	名古屋市教員	10名

埋蔵文化財愛知 No. 26

発行日　平成３年10月１日

編集発行　(財)愛知県埋蔵文化財センター
〒498　愛知県海部郡弥富町
大字前ケ須新田字野方802番24
ＴＥＬ．0567－67－4161～4163

印刷　有限会社　水野商会